カナダのガーデンライフ

道都大学短期大学部
建設科教授　佐藤勝泰

去る9月19日，林産試験場の職場研修として，佐藤教授に「カナダのエクステリアについて」と題して，ご講演をお願いしました。同氏は平成4年の冬と平成7年の夏に，カナダのエドモントン市とサスカツーン市で，一般住宅の暮らしと住まいについて調査してきました。ご講演では，その調査の中から，北海道よりも高緯度に位置し，冬も寒くて長い両市民の暮らしと庭（**写真1**）とのかかわりを中心に，資料とスライドでご説明いただきました。北海道での住まいを考えるうえで，大変参考になると思いますので，講演者のご了解を得て，講演内容の概要を紹介します。

ものづくりのポイント

私の専門分野は建築ですが，業種にかかわらず，ものづくりを考える場合は、次の三つの姿勢が重要だと思っています。

① 北海道だからといった地域性にこだわらない。
② 物，お金，人および時間の四つの要素をバランス良く組み合わせる。
③ 豊かさを考える。

これらのポイントのうち，「豊かさ」についても少し補足させていただきます。私は最近，戦後50年を経て日本人は本当に心豊かな生活を送っているのか，また，豊かさとは一体何なのか，問い直しています。

13年前にカナダへ行ったときのアメリカドルと円の為替レートは1ドル＝250円でしたが，今年行ったときは1ドル＝100円でした。そしてカナダドル＝0.75アメリカドルが相場です。したがって，規在のカナダドルの円に対する価値は，13年前の半分以下に減っていることになります。

カナダに移住した人が30～40年も働いてこつこつと蓄えたお金の価値と，カナダへ旅行する日本人が負担する旅費の感覚でのギャップはかなり大きいと思います。また，確かにカナダは，日本に比べ住宅や庭のつくり方などは粗雑にみえます。例えば，工務店の方々と一緒にカナダへ行くと「サイディングや庭のデッキ材などに使われている木材の表面仕上げは，びっくりするぐらいラフだ」とよく言われます。しかし，なぜかカナダの人々は，日本で暮らす我々よりも心豊かに生活しているように感じられるのです。お金の価値だけで豊かさは計れないと言うことかと思います。

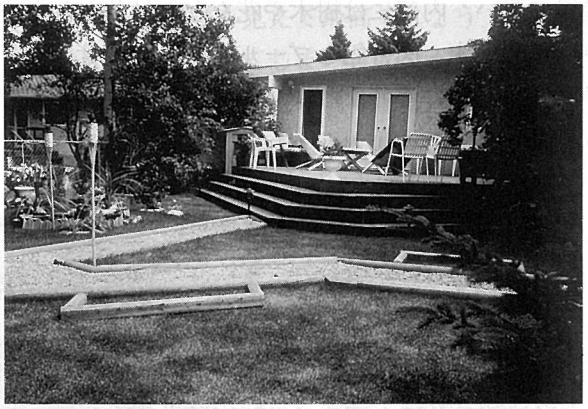

写真1　一般住宅の標準的な庭

スライドを見ていただきながら，地域性とか，物の組み合わせ方とか豊かさについての考え方を整理するヒントを探していただければ幸いです。

冬を楽しむ都市施設の工夫

両市の冬は，10月から4月ころまで続き，日照時間も短く，緯度が高いので朝8時でもまだ暗くて，仕事の終わる午後4時半にはもう真っ暗になります。気温は厳冬期になると，日中が氷点下30度前後，夜間には同40度近くにもなる日が続きます。このため，両市やカルガリー市などでは，中心部の各ビルは地上（スカイウェイ）と地下の連絡通路で結ばれています。

道内には札幌市などでデパートの新館と旧館を結ぶ

連絡通路があるのみで，将来は札幌市や旭川市でもこのような連絡網の整備に期待したいものです。

また，冬対策の一つとして，建物と建物をガラスの屋根（天蓋）で覆って人工的に明るさと暖かさを持った空間計画も取り入れられています。エドモントン市のアルバータ州立大学では，大学病院の病棟の間や，寄宿舎の棟の間がガラスの屋根で覆われています。後者の場合はハブと呼ばれ，空間をショッピングモールにして，寄宿舎に住む学生や近所の住民が冬でも寒さを感じることなく，買物を楽しんでいます（**写真２**）。エドモントン市のウエストエドモントンモールは，デパート，プール，遊園地などが一体となった複合施設で，巨大なガラスで覆われています（**写真３**）。この中では真冬でも従業員は半袖姿でした。

最近の新しい公共施設では，例えばプールと図書館が一緒になったコミュニティセンターにも，ガラスの屋根で覆い，内部には樹木や花などが植栽された空間が見られます。図書館とプールの組み合わせは，日本では行政管轄の違いなどから真似のしにくいものであると思いますが……。

写真２　アルバータ州立大学ハブモール

写真３　ウエストエドモントンモール

このように冬を快適に過ごすための施設は充実してきていますが，良いことばかりではありません。最近，ドブネズミの巣が増えているというのです。ドブネズミと言っても，本物の鼠のことではなくて，快適な温度環境の施設が青少年のたまり場になり，非行の温床になっている状況をそのように表現しているのです。

「おや？」と思った話

カナダ人の平均所得を知人に聞きますと，難民や先住民のインディアンの人達を，割算の分母に入れるか，入れないかで，その値はかなり違ってくるそうです。それぐらい，これらの人達の中には，
無職の人や低所得者が少なくないと言われています。

カナダは民族のモザイクと言われ，イギリス系やフランス系をはじめ，さまざまな民族の人達が暮らしています。カナダの総人口に占める先住民の人達の比率も比較的高く，その多くは公的な生活資金の援助を受けているそうです。大学教授や役所の部課長クラスの年収は，500～600万円程度とのこと。この10数年間の給与は不況のため，ベースアップがほとんどないそうです。大学では最近，助手の人達の解雇が相次いでいるとのことでした。

これも人に聞いた話ですが，カナダの西都バンクーバのあるブリティシュコロンビア州は，現在でも州全体の土地の名義はインディアンのものになっており，州政府とインディアンは借地契約を結んでいるそうです。これらの話が本当かどうか分かりませんが，団体でバスに乗って，観光地巡りをしていてはなかなか聞けない話だと思いました。

郊外の豪邸の暮らしと庭

日本からカナダに渡り，エドモントで約40年間大学教授を勤めた人の住宅は，室内にプールがある豪邸でした。広い日本風の庭には祖国への郷愁でしょうか，赤い太鼓橋が架けてあり，灯籠も置いてありました。

訪問したのは２年前ですが，転売の看板が立ててありました。その時のお話ですが，それまで一緒に住んでいた娘さん達は，寒くて暗い冬を嫌って，部屋に厚手のオーバーコートを置き去りにして，西海岸のバンクーバに行ってしまったとのことでした。

最近の知らせでは，ご夫婦も娘さんが暮らしているバンクーバへ転居したとのこと。長い間，日本を離れて暮らしていると，身体と神経が日本のリズムについ

ていけなくなり，カナダでも最も日本に近く，冬の過ごしやすいところに居を構えたそうです。

カナダのほとんどの住宅の庭にはデッキがあります。このデッキなどに使う木材，くぎ，塗料などの材料は，DIY（日曜大工）店で簡単に，しかも安く入手することができます。そして，この材料を使って，住み手の力と知恵で個性のある庭造りが行われています。

多くの人は，大工仕事の場として車庫を利用しています。車庫には，さまざまな道具類がそろえられており（**写真４**），冬期間の作業のために暖房器具を備えている家も多く見られました。

しかし，使われている木材は，前にもお話したように，極めてラフで，日本のようにきれいにかんなで仕上げたものではなく，ほぞなどの精巧な仕口は見られません。

そのデッキで，短い夏の日ざしを十分に楽しむ姿勢が強くうかがわれました。ちなみに，６月は夜11時ころまで，私が訪ねた８月でも夜10時ころまで陽が落ちません。この時期には，お客さんが来ると夜遅くまでデッキで虫ささされを我慢しながら，毛布にくるまって団らんの時を過ごすそうです。物の価値，生活の価値という点で，日本とは違う歴史，文化が根底にあるのでしょう。

北海道でこのようなデッキを取り入れた庭造りがあまり進んでいないのは，資金の問題もありますが，積雪量やメンテナンスに対する心構えの違いもあるのではないかと思います。カナダは積雪量が北海道に比べて少なく，雪の重みでデッキが傷んだり，木材が折れたりすることはありません。また，カナダの人はメンテナンスをしっかりと自分で行う習慣があります。

カナダの庭造りに欠かせないものに，花があります。花は夏に間に合うように，各住宅の地下室のプランターで種から育てる人が多いようです。そして，夏になると，各戸が競うように，一斉に花々を庭に植えたり，プランターに飾ります。

郊外へ転居した人の暮らしと庭

カナダでは都会に住んでいると，庭の芝刈りをしっかりしないと罰金が課せられたり，近所から庭の手入れが悪いと投書や苦情が役所に入ったりします。このような拘束から逃れようと，郊外の広い敷地でより自由に暮らす方法もあります。エーカレッジと呼ばれる郊外型住宅がそれです。その一軒を訪ねました(**写真５**)。

土地の広さは２エーカ（約8,100㎡）で，そこに大きな家と庭があり，訪れたときは，ちょうど親戚と家族がパーティを開いていました。

デッキからの眺めはご主人いわく「サウスサスカチュウワンリバーの川面も見えて最高でしょう！」の言葉に，つい相づちを打ってしまいましたが，内心では相手に大変失礼ですが，住宅の回りは荒涼たる地平線が広がるのみで，夜は多分あたりが真っ暗で街の灯も見えず寂しそうで，私にはさほどすばらしい眺めとは思えませんでした。日本であれば，必ずと言っていいほど視界の中に山があり，このような住環境はこの地ならではのものと思いました。

広い住宅の庭は，団らんのために集まりの場をデッキのほかに木かげにも設け，それぞれのところに手作りのベンチやテーブルを置き，その時の雰囲気などで使い分けています（**写真６**）。住宅内部の集まりの場も，リビングルームやファミリールームなど，お客さん用や家族用などに分けられています。

日本での集まりのスペースと言いますと，昔は４畳

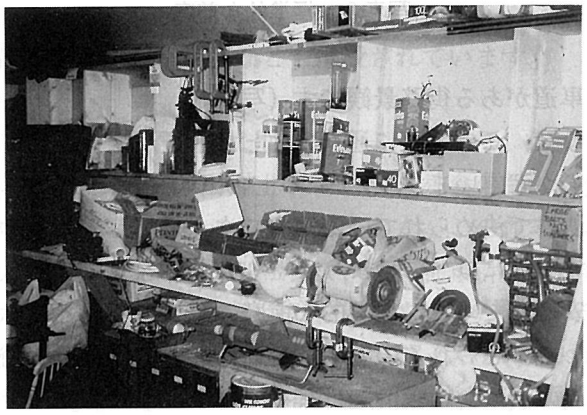

写真４　車庫の中のＤＩＹ工具

写真５　エーカッレジの大きな家と広い庭

写真６　庭の集まりの場

半とか６畳の茶の間に，家族の団らんの場がありました。最近は生活様式の洋風化によって，居間に対面式の応接セットを配置するのが標準装備というか，ステータスシンボルになってもいます。この応接セットは，ごろ寝用のベッド以外にあまり有効活用されていないようにも見えます。私は居間には応接セットを入れないで，座布団やクッションなどを置く方がよいとアドバイスしています。日本人も，屋外を含めて「集まりの場」を考え直すことも大切だと思います。

都市住宅の庭の裏・表

カナダ都市部の住宅は床面積がだいたい30坪(99m²)の地下室の上に，同じ床面積の平屋が載っているバンガロータイプと呼ばれるものが標準となっています。それらの住宅には必ずと言ってよいほど，裏庭と前庭の二つの庭があります。

都市部の古い住宅地には，住宅の裏庭に面して電柱が立ち，給排水菅が埋設されているサービス道路（バックレーン）があります。この道路に沿って，プライバシーを守るために板のフェンスを回しています。フェンスに使っている板の厚さは約24～30㎜と厚く，高さも２ｍぐらいの高いものがほとんどです（**写真７**）。フェンスは手作りのためか，波打ったように曲がったものも多く見られます。そして，このフェンスの内側に，個性豊かなデッキ，いろいろな花，ガーデンファニチュアなどが配置されています。

写真７　手づりのフェンス

このフェンスには，ごみ置きのスペースも組み込まれており，ごみ回収者がその外側で回収できるように配慮されています。しかし，大変残念なことに最近の新しい団地では効率的な土地利用や維持管理費を考えて，サービス道路を設けなくなってきているそうです。

裏庭には，子供のためにキッドハウスと呼ばれている木製の小さな家を作っているところも見られました。これは，子供の時から自分の家は自分で建てることやメンテナンスを行うことを教えている，つまり，住教育を行っているのだと思いました。

さて，通りに面した前庭の造りは，映画などでもよく見られるように，単純に芝生を張ったものが過半です。前庭の先には，舗装された歩道があります。さらに街路樹を植えて芝生を張ったグリーンがあり，そして車道がある街路景観です（**写真８**）。

写真８　標準的な前庭

なぜ，このように通りに面した景観が統一されているのかと言いますと，「裸の土を出してはいけない」と法律で決められているためです。したがって法律を遵守するには，このようなやり方が最も簡単で，しかも安価なために，標準的な前庭のつくられ方として普及したと思われるのです。最近は芝生に散布する大量の農薬漬けが社会問題になっているようです。

なお，カナダの平均的な住宅の裏庭と前庭の面積比

率は規在調査結果を整理中ですが，だいたい６：４くらいだと思います。

改修に精を出していた住宅

ドイツ系の人が暮らす住宅はプールもある立派な造りでした（**写真９**）。ここのご主人は定職を持たずに，奥さんが勤めに出ていました。ご主人は室内や外構の修繕や増・改築計画を何枚もスケッチに描いて，それを専門家に見せて，こまめに手直しを行っていました。その理由を聞くと，手を加えた住宅ほど転売時に高い値がつくためだそうです。

このようなことは日本では考えにくいことです。カナダではDIYで住宅の価値を高めることが，外に出て働く以上の経済価値を生むことになるのかもしれません。この大工仕事や庭づくりは，カナダ人にとっては単なる趣味の域ではないようです。

参考までに，カナダでプール付きの住宅は20戸に１戸程度の割合であるようですが，管理は大変なようです。プールの使用期間はかなり短いにもかかわらず，お金持ちの住宅ではボイラー付きの温水プールや気泡の出るジャグジー風呂なども併設されています。

写真９　プール付きの庭

ブランチに招かれた住宅

エドモントン市で調査中に，朝食と昼食の間の会食という意味のブランチに招かれました。この住宅のご主人はアゼルバイジャン出身で，市の都市計画の仕事にたずさわり，今は退職され，論文を書いたり，講演を行ったりしているそうです。庭のデッキで行われたブランチでは花つくりから都市計画まで話が及びました。このように，庭のデッキは国籍の違う人々とのコミュニケーションの場としても積極的に活用していました。また，ある住宅では，庭に神父さんと60人の出席者を呼んで結婚式を挙げたこともあったそうです。

盛んな家庭菜園

住宅の半分以上の庭では，花や樹木のほかに，じゃがいもや人参などの野菜づくり，ジャム作りに使うラズベリーや木いちごなども栽培しています。アメリカ人は都市生活を好むといわれますが，カナダ人の多くは都市生活をしながら土と触れ合い，存分に庭を活用した田舎生活の良さも楽しんでいるようです。

新しい住宅づくり

エドモントンとサスカツーンの両市はともに果てしない地平線が眺められる荒涼とした原野に，こつ然と存在する近代都市とも言えます。住宅の敷地は広く，家も大きいのですが，都市計画の推進上では，その広さや大きさが悩みの種にもなってきています。

例えば，郊外の広大な敷地を持つ住宅地では，ごみ収集や電気・水道などのライフラインの確保や治安・防災などのセキュリティの確保に膨大な公的資金がかかっています。また，古い住宅地では先に触れたように，住宅の裏庭に面して設けられたサービス道路の有効性が問い直されてきています。

そこで，最近の試みの一つとして，新しい住宅地では，景観に配慮した人工池を中心に，その回りを住宅が囲むように配置されています（**写真10**）。この手法は雨水を従来のように，遠方の河川まで地中に排水管を埋設するのではなく，ため池のような役割を持たせ，しかもこの池を利用して居住者が水に親しむ空間にも演出されています。

写真10　景観に配慮した親水空間を持つ住宅団地

このような新しい住宅地づくりに活躍しているのが，ランドスケープアーキテクトです。この人達は環境デザイナーとも呼ばれ，都市計画の基本を念頭に置きながら，道路から住宅の庭などの詳細な計画を行っています。現在，カナダではこのライセンスを持った人が約千人に達しているとのことです。

北海道の住宅地の景観については，まだ混乱期にあると思います。以前の三角屋根の町並みは，本州に行っても，ある意味で誇れたものであったと思います。今後は，家と庭については個性を尊重させながら，通りに面した土留めやフェンスなどの外構に統一性を持たす方向での北海道らしい住宅地景観の研究が重要だと思っています。

木の持ち味を活かすには

最後になりましたが，昭和60年ころ，私は当時の厚岸林務署（現厚岸道有林管理センター）の庁舎建設の基本設計に携わりました。木はすばらしい材料ですが，その持ち味を引き出すには，木だけで構成するのではなく，木の背景となり，しかも木と調和する材料を探すことが大切だと思います。そのような配慮から，庁舎の表玄関には，コンクリートのボックスの中に重みのある木製ドアを配置し，その回りの壁面にガラスを納めることによって，異種材の持ち味を生かしながら木を活かす演出を行いました（**写真11**）。

写真11　厚岸道有林管理センター

以上で，お話は終わりますが，今回の調査でカナダでは都市生活の中でも，まるで田舎生活のように土の香りする庭造りに励み，しかもその個性的な庭を短い夏のコミュニケーションの場として積極的に暮らしに活かしていると感じました。そして，北海道の住宅では本州の庭のような眺めるためのものではなく，使うための庭造りが北国らしい豊かな生活づくりに必要だと思っています。　**（文責　林産試験場　金森勝義）**

入会をおすすめ下さい

●会誌「ウッディエイジ」の発行（会員は無料）

●文献・資料のコピーサービス（有料）

●講習会・講演会

木材加工技術に関する講習会（会員は無料又は優待会費）や講演会を随時開催しています。

●現場技術のハンドブック等の刊行（実費頒配）

「テクニカルノート」のほか，新しい技術や新製品に関する技術資料を逐次刊行しています。

●技術相談・試験依頼等の斡旋

林産試験場に対する技術相談・分析・試験等のお取りつぎをします。

北海道林産技術普及協会の主な業務